

テーマ——ウイルス肝炎 平成27年度漢方医学講座・臨床講座

## 雑誌『漢方のめぐみ』／『活』からみた 肝胆疾患の漢方治療

あだち医院・一般財団法人日本漢方医学研究所

足立秀樹

(平成27年7月12日収録)

本誌『漢方のめぐみ』は、以前『活』という名前で発行していました。この二つの名前を持つ雑誌は、連続した一つの雑誌と考えていただいても良いのですが、昭和34年から続いています。この長い間に、色々な先生が執筆された様々な症例が載っています。今日は、この雑誌の記載を元にしてお話をするとすることにします。

### I. 現代医学の進歩と漢方による対応の変化

2011年にも銭谷先生からC型肝炎のお話をさせていただきました。そのときはペグ・インターフェロンとリバビリンの話が主でした。それにプロテアーゼ阻害剤が加わるかどうかという時期だったわけです。2011年に、銭谷先生と同時に、漢方のほうで肝炎の話をしてくださったのは貝沼先生でした。インターフェロン治療の際の副作用を、麻黄湯でなんとかしのいでインターフェロンを完遂させる。あるいはリバビリンの併用で貧血となり、患者さんの体力が弱ると、その体力低下を茯苓四逆湯で切り抜けて、インターフェロン+リバビリンの治療を完遂させる。このような話が主な内容でした。

現代医療は進歩し、変化してゆきます。同時に漢方のほうも、その現代医学の変化に応じて使われかたが変わってゆきます。しかし変わらない部分があるのも漢方の特徴なのです。

表1 『活』掲載 肝疾患総説

〈総説〉							
巻号	年	月	著者	シリーズ	題名	処方	
8	8	1966	8	石原明	漢方会	肝臓と漢方(1)	加味逍遙散
8	9	1966	9	石原明	漢方会	肝臓と漢方(2)	柴胡、白朮、茯苓、半夏、黄芩
8	9	1966	12	石原明	漢方会	肝臓と漢方(3)	黄芩解毒湯、五苓散
●28	8	1986	11	松田邦夫 稲木一元	初学者のための漢方	肝疾患	
●31	11	1990	2	佐藤弘	消化器領域の漢方治	肝疾患	
●36	5	1994	5	新井信	漢方医学基礎講座	消化器疾患の漢方治療(4)	
47	3	2005	3	貞沼茂三郎	インタビュー	C型肝炎に対する インターフェロンと茵陳蒿湯の併用療法	
53	9	2011	9	齋谷幹男	C型肝炎治療の最新株		ペグ・インターフェロンとパピリソ
53	10	2011	10	齋谷幹男	C型肝炎治療の最新株		ペグ・インターフェロンとパピリソ
53	11	2011	11	齋谷幹男	C型肝炎治療の最新株		ペグ・インターフェロンとパピリソ
53	12	2011	12	貞沼茂三郎	新しいインターフェロン治療 を行う際の漢方処方の活用		インターフェロンと茵陳蒿湯の併用 茯苓四逆散などの併用
54	1	2012	1	貞沼茂三郎	新しいインターフェロン治療 を行う際の漢方処方の活用		インターフェロンと茵陳蒿湯の併用 茯苓四逆散などの併用

## II. 肝炎

### 〈『活』の肝疾患総説〉

雑誌『活』には、肝胆疾患の漢方治療についての総説が何回か書かれています。これらの記事は1980年代半ばから90年代の半ばの辺りに集中しています(表1)。この頃は漢方による肝炎の治療が盛んにされていた頃ではないかと思えます。

その頃の総説に書かれている肝炎の治療原則を見てみましょう。

#### ■肝炎の治療原則

[1986年] 松田邦夫・稲木一元

1986年の総説です。急性肝炎の発黄前後に茵陳蒿湯、あるいは茵陳五

苓散など黄道が主目標となるような処方を使うことになっています。そして発症から少し経つと胸脇苦満が出てくるだろうから柴胡剤、あるいは柴胡剤に茵陳剤を加えたような処方を持つていく。この方針は、戦前あるいは江戸時代から一般的だったと思われまます。提示されているのは、さらに、これらに併用する処方として利尿剤や駆瘀血剤を使っていくというスタイルです。これも伝統的な方針といえます。

[1990年] 佐藤弘

基本処方は柴胡剤、人参剤、参耆剤というように方剤の幅が広がられています。そして併用薬剤として利胆剤(茵陳剤)、利尿剤(茵陳五苓散なども利尿剤といえます)さらに駆瘀血剤、それから八味丸など「下焦の虚」に使う薬が挙げられています。

[1994年] 新井信

基本処方のところは、胸脇苦満があったら柴胡剤、胃腸障害が強ければ人参剤や半夏瀉心湯、疲労倦怠が強ければ参耆剤となっています。状況により、また虚実により基本処方を選択しています。併用薬剤は、やはり利胆剤・利尿剤、駆瘀血剤などを状況に応じて使用してゆきます。

これらの総説を以下にまとめてみます。

## ■肝炎治療のまとめ

[肝炎に対する基本処方]

- ◆柴胡剤 胸脇苦満がある場合です。
- ◆人参剤など 胃腸障害が中心症状の場合です。六君子湯ときに半夏瀉心湯などになります。
- ◆参耆剤 疲労倦怠が強い場合です。補中益気湯・十全大補湯ですが、参耆剤ではありませんが小建中湯などが使用されることもあります。